



トンネル内部から入り口を見る。この奥に隠されたと思われる財宝の価値は、昭和19年当時3億円とすると、今は約600億円？

埋蔵金伝説はいくつかにパターン分けできる。数多い順に、〇〇長者の遺宝、敗軍の将の再興資金、

江戸時代の豪商の隠し財産と続き、その次あたりにランクされるのが、太平洋戦争の最中が終戦直後に、旧



夢と ロマンの宝探し

第4回 福井県の山中に隠された 旧日本軍の略奪財宝

作家、トレジャーハンター 八重野 充弘



日本軍が海外から持ち込み処分に困って隠したものだ。

実際に東京の隅田川河口で、大量の金やプラチナが見つかったこともあり、未発見の財宝もかなりあると思われる。しかし、話が生々すぎてロマンが感じられないので、筆者はあまり関心がなかったのだが、1997年の暮れに出会ったある人物の情報によって、この種のターゲットに初めて挑むことになった。

場所は福井県敦賀市。終戦までここには陸軍の戦費連隊が置かれていたが、日中戦争下の昭和15年に大陸から持ち込んだ相当数の美術工芸品を、連隊がヒルマなどに移駐する直前の昭和19年に山中に隠したという。その価値は約3億円(当時)。

命がけの調査開始

この話は、将校の一人が下宿先の旧家の主人に伝え、戦後しばらくしてから捜索が始まったのだが、最初は何の手がかりもなく、途中から鉱山技師で付近の山を知り尽くすT氏が仲間に加わった。そのT氏が埋め戻されたトンネルを発見し、以後、探査グループの最後の生き残りとして、断続的に調査を行ってきた。しかし決定的な成果はなく、年齢を重ねて継続が難しくなったため、筆者に助力を求めたのだった。

現場に案内してもらった

そこは身震いするほどリアルティが感じられる場所だった。ただ、途中の縦坑は土砂に埋もれ、天井も今にも崩れ落ちそうだった。命がけになるのは必至だが、T氏同様筆者も真実を突き止めたいたい思いがつのった。

そこで、安全に調査を進めるため、大阪で子どもたちにアウトドア活動の指導をしているグループに協力を求めることにした。1回につき3泊程度のキャンプを前提に、長期戦を覚悟しなければならなかった。段取りをつけるのと同時に、筆者はT氏に2つの条件を提示した。財宝を発見した場合には公表すること。そして、物件の由来を調査をしたうえで、当該国に返還すること。T氏はもちろん合意してくれた。

それから4年間、苦難の調査が続いた。多いときは年に4回、東京から車で6、7時間かけて現地入りし、大阪のグループと合流。若い人が多いので助かったが、標高800メートルの調査地点まで、工具類、電源、食料と水を運び上げるのはたいへんなことだった。しかも、狭いトンネルの中で、体を折り曲げ汗と泥にまみれて髪や頬を振るつのだ。

その結果、トンネルの最奥部までは辿り着くことができた。途中、四角い石を積み上げて漆喰のような



写真右側に、石を積み上げたような人工的な感じのするとこがある。宝蔵の入り口はここか。

〈やえの みつひろ〉



ぼくはトレジャーハンター『埋蔵金発見！ 解き明かされた黄金伝説』など。趣味は映像制作。

1947年、熊本県生まれ。立教大学社会学部卒。学習研究社、くもん出版でおもに子ども向けの雑誌の編集に携わりながら、1974年に天草四郎の隠し財宝の調査に着手、以後、徳川の埋蔵金など全国各地の伝説を調べ、実際に発掘調査を行った場所も10数カ所に上る。まだ発見したものはない。著書は『日本の埋蔵金100話』『埋蔵金伝説を歩く〜

ので固めた形跡のある箇所が見つかっている。トンネルの脇に空洞を掘って宝蔵をつくり、入り口を塞いだように思える。あともう少し。その手応えはあるのだが、実はそこで作業が中断し、10年以上

が経過している。落盤と酸欠の危険に加えて、付近にクマが出没するようになっただからだ。しかし、方法は必ずあるはず。今は懸命に再開のための秘策を練っている。